



作文コンクール授賞式の写真

浦野さんは「災害の直接死より、避難途中や避難後に亡くなる『災害関連死』の方が多し。避難所での過ごし方、避難所運営などを事前に推定しておくことも大切。また、子どもたちから防災意識を持つことが大事」と呼びかけます。

昨年、小中高校生を対象とした「第一回全国子ども防災作文コンクール」(元警視総監・井上幸彦実行委員長)が開催されました。子どもが公園で遊んでいるとき、一人で家にいるときなどに、突然の災害が起こっても、自ら判断して命を守る行動ができるようになるには、日頃から防災を

「全国子ども防災作文コンクール」を初開催

浦野さんは「災害の直接死より、避難途中や避難後に亡くなる『災害関連死』の方が多し。避難所での過ごし方、避難所運営などを事前に推定しておくことも大切。また、子どもたちから防災意識を持つことが大事」と呼びかけます。

昨年、小中高校生を対象とした「第一回全国子ども防災作文コンクール」(元警視総監・井上幸彦実行委員長)が開催されました。子どもが公園で遊んでいるとき、一人で家にいるときなどに、突然の災害が起こっても、自ら判断して命を守る行動ができるようになるには、日頃から防災を

えておくことが大切になります。

作文コンクールは、課題図書『ボクラはこうして戦う』(全国子ども防災作文コンクール実行委員会)を読み、家族や友だちと話し合ったり、住んでいる町の防災を調べるなどで、「そのとき」に自分はどうするかを作文にするもの。浦野さんは「子どもたちの命を守ることを目的に企画したものです」と話し、作品を読み子どもたちの感性のすばらしさを感じたといいます。

全国を巡り、防災士の活動の現状を見たり、子どもたちと一緒に訓練を体験している浦野さん。地域によって住民の防災意識は異なり、連携の仕方もさまざまだといいます。

「防災は、終わりのない、途絶えることのない取り組みです。訓練を受けた子どもが目を輝かせて保護者に防災のノウハウを語っている姿は実に頼もしい。伝承や災害体験から学んだ教訓を知っている世代が、孫子世代に伝え続けることの大切さを感じます。地道に訓練や作文コンクールなどを続けることが、未来の消防団員確保にもきつとつながるはず。地域に合った形で連携して、多くの人の命を守ることに役立っていきなさい」と、今後の防災士の活動と資格普及への思いを話していました。

(聞き手 西多摩新聞社 関根和美)

防災士の資格を取得するには

- ①日本防災士機構認証の民間研修機関・大学等学校・自治体が開催する研修講座を受講する。
- ②日本防災士機構が実施する「防災士資格取得試験」を受験し合格する。
- ③消防署、日本赤十字社等が実施する「救急救命講習」の受講修了証を取得する。
- ④日本防災士機構に防災士認証登録申請を行う。



NPO 法人「日本防災士機構」発行「防災士」パンフレットより

防災士の資格取得の流れ

詳細は、NPO 法人「日本防災士機構」(☎03-3234-1511) まで。資格取得の費用は、テキスト代含め約6万5千円になります。

ZOOM UP

ズームアップ

命を守る「防災意識」を！ - 自助・共助・協働 - 防災士に聞く



地震や台風などの自然災害は、いつ、どこで起こるか分かりません。そのためにも日ごろから防災意識を高めておくことが大切になります。

今回は日本防災士機構が認証する「防災士」第1号であり、日本防災士会会長、あきる野市防災・安心地域委員会メンバーでもある浦野修さん(76、あきる野市在住)に防災士の資格と役割をうかがいました。

浦野 修(うらの おさむ)：1943(昭和18)年生。元全国郵便局長会会長、現在、同会顧問、NPO 法人日本防災士会会長。2013(平成25)年秋の叙勲で瑞宝双光章受章。

減災と防災力向上のために「防災士」が誕生

「防災士」は、自助、共助、協働を原則として、さまざまな場で防災力を高める活動が期待されます。そのための十分な意識と一定の知識・技能を修得したことを「NPO 法人日本防災士機構」が認証した人です。

1995年に発生した阪神・淡路大震災の後、「事前の防災対策」と「減災活動」の両方の備えが全国的に必要とされました。

99年から関係者らの検討が続き2002年に「日本防災士機構」が設立され、翌03年10月に初めての防災士が誕生。防災士制度がスタートしました。

2020年2月末日現在、防災士認証者は全国で19万4577人(内東京都1万5803人)。

女性の割合も年々増え、全国で3万843人が認証されています。

「NPO 法人日本防災士会」は、防災士の資格を持つ有志で構成され、会員相互の交流と親睦を図り、一人ひとりのスキルアップと地区防災力の向上を目指した活動を実施しています。

また、災害被災地に行き、地域のボランティアセンターなどと連携を取り、復興支援なども行っています。

「助けられる人」より「助ける人」に

浦野さんは、「防災士は先ず自分と家族を守るために、わが家の耐震補強、家具固定、備蓄などを勧め、それを親戚や友人、知人に広めていくとともに、地域・職場での防災啓発、訓練を実施してほしい」と話します。

「誰かが積極的に声をかけなければ、人は動きません。自分も防災士の一人として、先ず自ら動き、周囲に日ごろから防災意識を持つことの大切さを伝えていきます」とソーラーライトなど、さまざまな防災グッズを見せてくれました。

日本防災士会の公式サイトでは、会員や支部の活動状況、防災情報などを共有できます。

例えば、愛知県知立(ちりゅう)市では、防災士をはじめ、自主防災会や消防団、防災マ「かきつばた」(防災に関心がある地域母親たちの集まり)など約100人を対象にした防災士リーダー研修会などの様子を、市内在住の防災士が作った「知立市防災士だより」で発信しています。



「スマホ充電端子付セーフティランタン」。青梅市友田の「ケー・エス・ケー」で制作している。